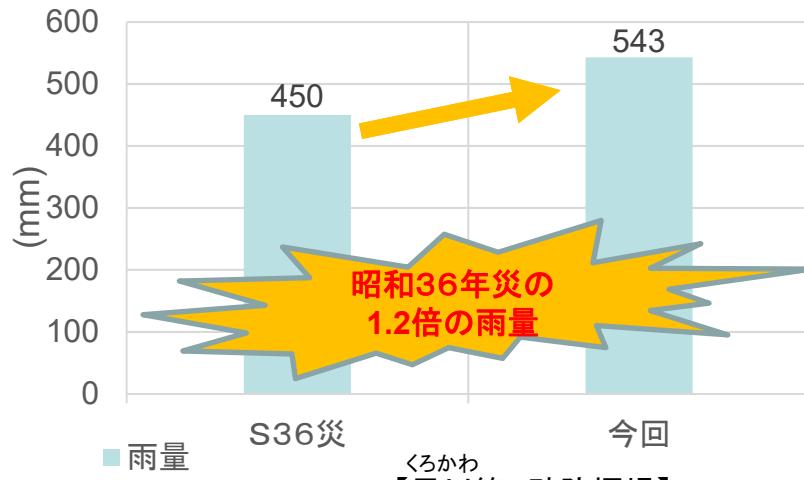


着実な砂防施設の整備により土砂・洪水氾濫を防止 ～令和3年 8月梅雨前線による伊那谷の豪雨～

- 令和3年8月 梅雨前線により、戦後最大の災害「昭和36年災」を超える543mmの3日間雨量を観測、流域の砂防施設が効果を発揮。
- 昭和36年災では136人の死者・行方不明者、8,800戸を超す家屋被害が発生したが、その後の着実な砂防施設整備により、土砂洪水氾濫を完全に防止。
- 昭和36年災以降の砂防の設備投資約2,100億円により、流域の約2,600億円の資産に対して被害を軽減。
- 今回は昭和36年災を超える豪雨による被害は防止できたが、今後予想される気候変動の影響による大雨に対応するため更なる整備を推進していく必要がある。

昭和36年災と今回の3日間雨量の比較

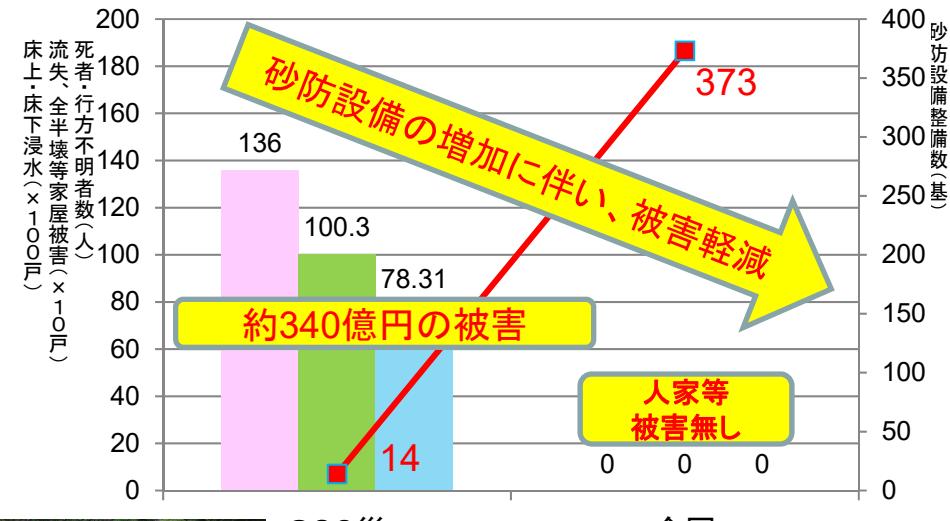


砂防堰堤整備により土砂・流木を捕捉
土砂 約44,000m³
流木 約800m³を捕捉



防災・減災、国土強靭化のための3か年緊急対策

昭和36年災の出水の被害状況と今回の比較



※砂防設備整備数は天竜川流域の直轄分の集計
※被害状況は天竜川流域(長野県)の集計(天竜川水系河川整備計画より転載)
※3日間雨量は天竜川流域(長野県)での最大の雨量観測所の値(太田切川)
※被害額は天竜川上流域の当時の被害額
※資産(便益)は1/100洪水時の土砂・洪水氾濫における被害から計算